



◆ 理事長ご挨拶

News Letterの創刊にあたり



鴨下 重彦

小児医学研究振興財団の設立は、日本小児科学会の創立百周年の記念事業の一つとして計画され、10年を超える長い期間に亘り準備を進めて参りましたが、昨年4月4日付けで厚生労働大臣の許可を受け、正式に財団法人として発足いたしました。これまでに
ご支援を賜りました小児科学会及び多数の会員の皆様、また絶大なご支援を頂いた日本製薬団体連合会をはじめ各企業の方々、そして設立のためにご指導・ご尽力頂いた旧厚生省、厚生労働省の方々、そのほか多くのお世話になった関係の皆様方に、深く感謝申し上げます。お陰様でこのたび財団のニュースレターも発刊できる運びとなりました。

日本の社会は少子高齢化が急激に進み、子どもの数が少なくなる一方で、虐待やいじめは後を絶たず、不登校や摂食障害など心身症は激増し、少年犯罪の多発、逆に子どもが犯罪の犠牲になるなど、子どもをめぐる環境は未曾有の深刻な状況に陥っております。このようななかで、持続可能な国の発展をもたらす、日本が世界人類の福祉に貢献するためには、子どもたちの健全育成以外に道はありません。

本財団は子どもたちの心身の健康を守る小児科医や小児医学医療研究者を支援するために設立されたのであり、その責務は極めて重いことを痛感いたします。今後、ニュースレターを通じて財団の事業をご紹介します、賛助会員の皆様方との連携を深めるとともに、広く一般社会の方々への啓発にも努力したいと考えております。

題字の「子どもたちの世紀」は、学会が創立百周年を迎えた当時の厚生大臣であられた小泉純一郎先生に揮毫をお願いしてご快諾頂き、総理大臣ご在任中にお書き下さいました。今、それを掲げて船出が出来ることは、大きな喜びであり、21世紀を生きる子どもたちが笑顔をもって育ち、将来、平和で希望に満ちた明るい社会を築いてくれることを衷心より願ってご挨拶いたします。



お知らせ

下記の下で国際シンポジウムを開催いたします。
詳細については次号でお知らせします。

「母子保健をグローバルに考える」

日 時：平成21年11月20日（金）13時～17時（予定）
会 場：国立国際医療センター5階 大会議室
主 催：（財）小児医学研究振興財団／（財）国際協力医学研究振興財団
内 容：世界における母子保健分野の課題と対策、その他



ご報告

「理事会・評議員会だより」

平成21年2月26日（木）、理事会・評議員会がKKRホテル東京で開催され、平成21年度の事業計画および収支予算の審議が行われました。



役 員

理 事 長	鴨下 重彦	国立国際医療センター名誉総長
常務理事	松尾 宣武	国立成育医療センター名誉総長
常務理事	柳澤 正義	母子愛育会日本子ども家庭総合研究所所長
理 事	天野 暉	日本小児科医会顧問
理 事	岩田喜美枝	（株）資生堂副社長
理 事	衛藤 義勝	東京慈恵会医科大学遺伝病研究講座教授
理 事	加藤 達夫	国立成育医療センター総長
理 事	小林陽之助	関西医科大学名誉教授
理 事	坂田 和信	日本小児医事出版社常務取締役
理 事	清野 佳紀	大阪厚生年金病院長
理 事	高久 史磨	日本医学会会長
理 事	竹中 登一	日本製薬団体連合会会長
理 事	橋本 徹	国際基督教大学理事長
理 事	前川 喜平	神奈川県立保健福祉大学大学院教授
理 事	南 砂	読売新聞東京本社編集委員
理 事	村田 光範	東京女子医科大学名誉教授
監 事	濱本 英輔	元国税庁長官
監 事	飯島 東一	公認会計士

評 議 員

有賀 正	北海道大学大学院医学研究科	小児科学教授
五十嵐 隆	東京大学大学院医学系研究科	小児科学教授
内山 聖	新潟大学大学院医歯学総合研究科	小児科学教授
衛藤 隆	東京大学大学院教育学研究科	教授
大澤真木子	東京女子医科大学	医学部長
大藪 恵一	大阪大学大学院医学系研究科	小児科学教授
倉辻 忠俊	国立成育医療センター研究所	名誉所長
黒田 泰弘	徳島大学	副学長
河野 陽一	千葉大学医学部附属病院	院長
小島 勢二	名古屋大学大学院医学系研究科	小児科学教授
高橋 孝雄	慶應義塾大学医学部	小児科学教授
千田 勝一	岩手医科大学	小児科学教授
土屋 滋	東北大学大学院医学研究科	小児科学教授
中畑 龍俊	京都大学大学院医学研究科	小児科学教授
原 寿郎	九州大学大学院医学研究院	小児科学教授
舟島なをみ	千葉大学看護教育学教育研究分野	教授
別所 文雄	杏林大学医学部	小児科学教授
松井 陽	国立成育医療センター	院長
宮本 信也	筑波大学大学院人間総合科学研究科	教授
桃井真里子	自治医科大学	小児科学教授
森島 恒雄	岡山大学大学院医歯学総合研究科	小児科学教授



財団の発足をお祝いして



厚生労働省雇用均等・児童家庭局長

村木 厚子

ニュースレターの創刊おめでとうございます

この度は、財団法人小児医学研究振興財団の設立及び、ニュースレターの創刊、誠におめでとうございます。

私ども雇用均等・児童家庭局においては、「『子どもと家族を応援する日本』重点戦略」に沿って、働き方の改革による仕事と生活の調和の実現と、子育て支援基盤の充実の二つの取組を車の両輪として、総合的な次世代育成支援対策の推進に取り組んでいます。子どもの健やかな育ちを支える小児保健医療の充実を図ることは、次世代育成支援対策の入口に位置する重要な基盤的施策であると認識しております。

改めて申し上げるまでもございませんが、わが国の小児保健医療の水準は、乳児死亡率などの指標からも明らかな通り、世界最高の水準を維持しておりますが、近年、急速な少子・高齢化が進行し、子どもやその家族を取り巻く環境は急速に変化する中で、小児保健医療を巡っても様々な課題が新たに生じています。一方、国際的には、小児医療水準の低い途上国との交流を深め、わが国の優れたノウハウを活かした支援を強化することが、わが国に求められております。

このような状況において、財団法人小児医学研究振興財団が設立され、小児医療に係る研究助成、人材育成、国際交流、広報啓発などの事業を展開されることは、まさに時機にかなっており、私どもとしても、貴財団の活動に大いに期待しているところです。

財団法人小児医学研究振興財団の今後の発展を祈念申し上げ、創刊に寄せての挨拶とさせていただきます。



日本小児科学会会長

横田 俊平

お祝いの言葉

医療を支え、質の高い医療を提供するには、1) 現場の医療活動、2) 制度的な医療供給体制整備（行政）、3) 臨床医学研究、4) 医学教育・研修の4点が、必須の要素として挙げられます。とくに臨床医学研究と医学教育・臨床研修の2点は、小児科学および小児医療を継続的に発展させ、子どもたちのための高度の医療を展開する上でもっとも重要な要素です。

このたび、鴨下重彦理事長の献身的なご努力により「財団法人小児医学研究振興財団」が設立され、研究助成事業、人材育成事業、国際交流事業などを立ち上げ小児医学の発展ために貢献して下さることとなり、まことにご同慶の至りであります。

人類がこれまで経験したことのないような速度で少子化がすすむわが国においては、子どもの健全育成がなにより重要で、そのためには日々発育・発達する子どもたちに寄り添い、家族の子育てを支援する高度な知識、医療技術をもったところあたにかい小児科医の存在が不可欠です。小児科医を志そうとする若き医学生、臨床研修医が、その力を十二分に発揮できるように、高度の臨床研究、優れた医学教育・臨床研修に触れる機会をできるだけ多く提供すべきであると考えます。

今後この財団のさまざまな事業の展開により、わが国の小児医学、小児医療の質がさらに高まることを願って止みません。日本小児科学会もそのための努力を行っていきたいと考えております。まずはこのニュースレターを通じて、さまざまな分野の皆様の意思疎通が図れるとよいと思います。未来を作る子どもたちのために！

研究助成金・海外留学フェローシップ・アワード 選考結果

2月26日（木）第1回選考委員会が開催され、下記のとおり受賞者（交付対象者）が決定されました。



研究助成金（交付対象者 7名）

【助成総額 1000万円】

森本 哲（自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科・准教授）
「ランゲルハンス細胞組織球症（LCH）の骨免疫学視点からの病態解明と新たな治療法の開発」
－LCHにおける破骨細胞機能亢進の証明と破骨細胞抑制薬の効果－

本田 秀夫（横浜市総合リハビリテーションセンター・担当部長兼医療課長）
「自閉症の長期転帰にかんする悉皆調査」
－幼児期に発症率を算出した出生コホートの20歳までの追跡－

海老原 康博（東京大学医科学研究所附属病院・助教）
「ヒトiPS細胞を用いた先天性骨髄不全症候群の病因・病態の解明と治療法の開発」

顧 艶紅（国立成育医療センター研究所・成育政策科学研究部・Research Fellow）
「Menkes Kinky Hair 病患者の治療実態及び治療法の開発」

滝田 順子（東京大学医学部附属病院無菌治療部・講師）
「トランスレーショナルゲノミクスに基づいた難治性小児腫瘍における新規治療法の開発」
－小児固形腫瘍の網羅的ゲノム解析－

村山 圭（千葉県こども病院・代謝科医長）
「小児期ミトコンドリア呼吸鎖複合体異常症の研究」
－迅速な酵素診断と分子病理に関する解明－

永井 周子（京都大学大学院医学研究科・社会健康医学系専攻健康情報学分野・博士後期課程）
「開発途上国における低出生体重児に対する家庭を基盤とした新生児ケアの実施可能性の検討」



イーライリリー海外留学フェローシップ受賞者

山澤 一樹（国立成育医療センター研究所 小児思春期発育研究部流動研究員）

「生活習慣病における胎生期プログラミングを制御するエピジェネティックな機序の解明」



イーライリリーアワード受賞者

和文誌：筆頭筆者

日比野 健一（静岡川崎病研究会・藤枝市立総合病院小児科）

「川崎病治療に関する多施設共同研究」

日本小児科学会雑誌 2008;112(8):1227-1232

欧文誌：筆頭筆者

神岡 一郎（神戸大学医学部小児科・加古川市民病院小児科）

「Risk factors for developing severe clinical course in HUS patients : a national survey in Japan」

Pediatrics International 2008;50(4):441-446

平成21年度事業について

平成21年度も下記の事業を実施します。
詳細は随時ホームページでお知らせいたします。

1) 研究助成事業

① 研究助成

- （1件200万円以内、総額1000万円）
- 小児に関する疾患の診断・治療・予防に関する研究助成
 - 高度先進的医療開発のための基礎的研究助成
 - 生命倫理など社会的問題に関する研究助成
 - いじめ、虐待、拒食などの子どもの心のケアや心身症に関する研究助成
 - 生活習慣病の予防、その他子どもの健康に関する研究助成

② 研究奨励金（イーライリリーアワード）の授与

2) 海外留学フェローシップ（イーライリリーフェローシップ）

3) 国際シンポジウム（4面にお知らせ）